

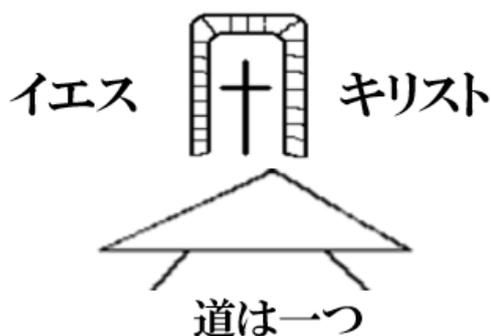
ペテロ書簡 #24

信仰の力学 (Faith Dynamics)

(オンライン版: Ichthys.com)

ロバート・D・ルギンビル (博士)

永遠



命にいたる門は狭く、その道は細い。そして、それを見いだす者が少ない。(マタイ 7 章 14 節)

#### 第一ペテロ 1 章 8-9 節 (私訳)

[v7…イエス・キリストの栄光の再臨のときに。]あなたがたは、これまで主をこの目で見ることがなくても、主を愛しています。いま現在、主を見ることができなくても、主を信じています。だからこそ、あなたがたは言い表しがたい喜びに—来たるべき栄光の未来を先取りする喜びに—あふれています。やがてあなたがたは、信仰の目的であり目標でもある「いのちの救い」という最終の栄冠を、勝利のうちに受け取るのです。

#### 序論:

これで、ペテロの冒頭の頌栄——すなわち、私たち一人ひとりに与えられた多くの祝福のゆえに御父なる神を心から賛美する言葉——の学びを締めくくろうとしています。第 9 節の結論部で私たちの注意を引く主題は、人生の試練のただ中であって信者の信仰がどのように持ちこたえるのか、という点です。ペテロは「生ける望み」、すなわち私たちのからだの復活と、やがて来る永遠の祝福への期待を語りますが、その語り口は、いま私たちが知っているこの世の姿を現実的に見すえています。時間の中では、信者の生涯は患難の連続です。事実、イエス・キリストを信じる者として、私たちはサタンから激しい敵対を受ける運命にあります。そのため、最終的な勝利——すなわち、信仰を保ったまま生涯を走り終えること——は、ペテロによって劇的な言い方で描か

れます。救いは、勝ち取るべき「賞(プライズ)」なのです(ギリシヤ語 komizō: 努力に応じて「運び去る・受け取る」。[第一ペテロ 5 章 4 節](#); [第二コリント 5 章 10 節](#); [エペソ 6 章 8 節](#)参照)。しかもこの最終的な救いこそ、私たちの信仰の究極の「目的」です。これを得ることによって、私たちは安全に、しかも最終的かつ不変のかたちで「救われた」者となるからです。とはいえ、その最終勝利に至るまでは、私たちは——そしてこれからも——自分の〔永遠の〕いのちそのものが懸かった激しい戦いのただ中に身を置くことになります。

**信仰をめぐる戦い:** 主イエス・キリストに対する私たちの信仰には、それに逆らうサタンのあるあらゆる敵対にもかかわらず、あらゆる点において偉大な報いがあります。私たちは確信をもって、新しいいのち、新しいからだ、そしてやがて訪れる新しい天と新しい地におけるすべての祝福を待ち望んでいます。これこそが私たちの希望です！しかし、イエス・キリストに対する私たち個々人の信仰が持続しなければ、この希望はまったく空しいものとなってしまいます。

現代の福音派の集まりでよく耳にする主張、すなわち個人の信仰の維持と持続が「自動的に」起こるという見解は、悲劇的な誤りです。従来のカルヴァン主義的な立場、つまり「信仰を持続できなかった者は、そもそも最初から本物の信者ではなかった」という単純化された見解もまた、同様に誤りです。以前、私たちは種まきのたとえを詳しく学びました([第一ペテロ講解#12-#13, #16, #18](#); [マタイ 13 章 1-23 節](#); [マルコ 4 章 1-20 節](#); [ルカ 8 章 4-15 節](#))。そこでは、神のことばの種は四種類の地に落ちました。すなわち、硬く踏み固められた道ばた、岩地、茨の地、そして良い地です。この中で特に注目すべきは岩地の場合です。このタイプは、最初は確かに信仰を表明するものの、圧力が加わると脱落してしまう人々を表しています。こうした信仰は救いには十分ではありません。なぜなら、その人は「最後まで耐え忍ぶ」ことをしなかったからです([マタイ 24 章 13 節](#))。すなわち、そうした人々は一時的にはキリストを信じたものの、ある時点でその信仰が消え失せ、不信仰の状態に逆戻りしてしまっただけです。

クリスチャン生活において、これほど重大な問題はありません。キリストへの信仰を失えば、私たちは本当に滅びの道に入り、「彼らの後の状態は初めよりも、もっと悪くなる」という言葉が現実となります([第二ペテロ 2 章 20-22 節](#))。キリストへの信仰喪失という問題を詳しく見る前に、まず、救いのためにキリストを信頼するとはどういうことかをはっきりさせておく必要があります。

**信者になること:** すべての人は、その生涯のどこかで、神の現実と力とを真正面から突きつけられます([ローマ 1 章 18-23 節](#); [伝道の書 3 章 11 節](#))。同じく、自分の罪深

さと、その結果として全能の神の前に負う罪責を悟ることも、万人共通の現実です(ローマ2章14-16節; ヘブル9章27節)。それなのに、神の無代価の賜物——御子イエス・キリストによる救い——をこれほど多くの人が受け入れようとしないのは、驚くべきことです。肉体の死が避けられないという厳然たる事実だけでも救い主の必要に気づく動機として十分なはずですが、少なくとも、正義を要求される神の御手からの解放という望みは、彼らを動かしてもよさそうに思えます。

もしわたしたちが、真理の知識を受けたのちにもなお、ことさらに罪を犯しつづけるなら、罪のためのいけにえは、もはやあり得ない。ただ、さばきと、逆らう者たちを焼きつくす激しい火とを、恐れつつ待つことだけがある。(ヘブル10章26-27節)

福音の約束には、私たちが——自分の行いではなく——キリストの死に拠り頼むことによって罪から解放される、という良い知らせが含まれています。したがって、神のさばきの予感と、その予感からの祝福された解放は、未信者にキリストを救い主として受け入れるよう勧める際の正当な要素です(使徒の働き24章15節・25節参照)。事実、ピリピの看守を強く動かしたのは、神が起こした地震という、差し迫ったさばきへの恐れでした。牢の戸が開くのを目の当たりにして神の力の現実を思い知らされた彼は、パウロたちに切迫して尋ねました。「先生方、救われるためには、私は何をしたらよいのでしょうか」。パウロの答えは即座で明確でした：

「主イエスを信じなさい。そうすれば救われます」。(使徒行伝16章31節)

これが最も簡潔な救いの招きです。キリストを「信じる」ことによって救われる。実にそれだけです。キリストに信頼を置くことによって、あなたはクリスチャンになります。ヘブル書の筆者が思い起こさせるように、聖書はこのことを「あらゆる時代に、あらゆる方法で」明らかにしてきました(ヘブル1章1節)。チャールズ・ライリーは『聖書教理概説』の中で、新約だけでも二百以上の箇所が、救いは信仰のみによると述べていると数え上げています。では、どうすればキリストの信者、クリスチャン、キリストの弟子になれるのでしょうか。キリストを信じればよいのです。その瞬間、あなたは神の家族の一員となり、キリストのからだ—教会—の一部となります。主を受け入れる時点で必要な情報量は、救われた後に与えられる壮大な真理の宝庫に比べれば、からし種のように小さなものです。問題の核心は「キリスト」です。神の永遠のいのちの恵みを受け取るには、まず御子—キリストのご人格と御業—を受け入れなければなりません。

わたしを通してでなければ、だれも父のみもとへ来ることはできません。(ヨハネ14

## 章 6 節)

**神の無代価の賜物：**救いは、イエス・キリストを通して与えられる神の無代価の賜物です。永遠のいのち、死とさばきからの解放は、この地上のどんな代価でも買い取ることはできませんが、ただで授けられます。というのも、イエス・キリストがすでに十字架で、私たちの身代わりとして代価を払ってくださったからです。犠牲によって私たちを「贖い」、私たちが犯すすべての罪の代価を支払い、楽園への門を開いてくださいました。もしまだ受け取っていないなら、いのちの水は今この瞬間、無代価で、飲みたい人に自由に用意されています。主イエス・キリストを信じなさい。そうすれば救われます。私たちはキリストの大使として——まるで神が私たちを通してあなたに懇願しておられるかのように——お願いします。どうか神と和解してください([第二コリント 5 章 20 節](#))。

あなたがたは、心を騒がせないがよい。神を信じ、またわたしを信じなさい。わたしの父の家には、すまいがたくさんある。もしなかったならば、わたしはそう言っておいたであろう。あなたがたのために、場所を用意しに行くのだから。そして、行って、場所の用意ができたならば、またきて、あなたがたをわたしのところに迎えよう。わたしのおる所にあなたがたもおらせるためである。(ヨハネ 14 章 1-3 節)

神はそのひとり子を賜ったほどに、この世を愛して下さった。それは御子を信じる者がひとりも滅びないで、永遠の命を得るためである。(ヨハネ 3 章 16 節)

あなたがたの救われたのは、実に、恵みにより、信仰によるのである。それは、あなたがた自身から出たものではなく、神の賜物である。決して行いによるのではない。それは、だれも誇ることがないためなのである。(エペソ 2 章 8-9 節)

この人による以外に救はない。わたしたちを救いうる名は、これを別にしては、天下のだれにも与えられていないからである。(使徒行伝 4 章 12 節)

主イエスを信じなさい。そうすれば救われます。(使徒行伝 16 章 31 節-ESV 訳)

聖書の証言は、これ以上ないほど明瞭です。あなたがすべきことは、愛なる神の恵みの申し出—すべてをすでに成し遂げてくださった申し出—を受け入れることだけです。あなたのために、神が御子をお与えになった以上に、何をしてくださるというのでしょうか。あなたがすべきことはただ一つ。主イエス・キリストに信頼を置き、主を信じること

です。そうすれば永遠のいのちはあなたのものです。神が求めておられるのは、この言い尽くせない賜物を拒まないこと、それだけです。

御霊も花嫁も共に言った、「きたりませ」。また、聞く者も「きたりませ」とい  
なさい。かわいている者はここに来るがよい。いのちの水がほしい者は、価なし  
にそれを受けるがよい。(黙示録 22 章 17 節)

### キリストに対する信仰の諸原則：

אָמֵן *'aman*      πιστεω *pisteuo*

**信仰の語源について：** 聖書は「信仰」という教えを扱う際に広い語彙を用いていますが、英語の「faith(信仰)」という概念を最もよく表しているのは、ヘブル語の *'aman*(アーマン) とギリシア語の *pisteuo*(ピスチュオー)(およびその派生語)です。どちらの動詞も多くの場合「信じる」と訳されます。たとえば、創世記 15 章 6 節で「アブラハムは神を信じた。それで神は彼を義と認められた」とありますが、ここで用いられている言葉がアーマンです。この動詞の語根は「堅固で信頼できる」という意味に関連しており(例えば *'amunoth* アームノス は「柱」を意味し、*'amen* アーメン — 私たちが祈りの最後に言う「アーメン」— は「まことに、そのとおり、確かに」を意味します)、ヘブル語において「信じる」という概念には、「信仰の対象(すなわち神)が信頼できるお方である」という意味合いが含まれているのです。アーマンは、堅固な柱が私たちを支えてくれるように、私たちが神によりかかるとき、神は必ず支えてくださることを暗示しています。そして私たちは皆、これに「アーメン！」と応答できるのです。一方、ギリシア語ヤのピスチュオーは七十人訳聖書(紀元前 3 世紀に旧約聖書をギリシア語に翻訳したもので、新約聖書の文体や語彙に大きな影響を与えました)においてアーマンを訳す際に用いられており、常に同じ「神への信頼」という含意を持っています。ギリシア語でピスチュオーは「ある対象を信じる、信仰する」という意味です。そしてその反対語である *apistia* アピスチア(不信仰、信頼しないこと) が示すように、ピスチュオーが意味する「信仰」は、単なる知的な理解以上のものであり、意志的な心の態度を伴うのです([ローマ 11 章 20-23 節](#)では、「不信仰」は非常に意志的な心の状態として描かれています)。さらに、新約聖書の諸書簡の著者たちは ピスチュオーの分詞形を、私たちが「信者」という名詞で表す場面に用いることがあります。これは重要な点で、聖書記者たちにとって「信者」とは、「信じる」という行為に常に関わっている人々であることを示しているのです。時制の違いによって「信じた」(過去の行為、[使徒行伝 18 章 27 節](#), [19 章 18 節](#), [21 章 20 節](#), [25 節](#); [テトス 3 章 8 節](#))、「信じ続けている」(現在継続: [エペソ 1 章 19](#)

節)、「一度限りで成就した」(完了形: [ヘブル 4 章 3 節](#))といったニュアンスの違いはありますが、名詞の代わりに分詞が用いられることによって、「信者とは、絶えず『信じる』という行為に関わっている人々である」ということが極めて明確に示されているのです。

**信仰の定義:** ヘブル書によれば、信仰とは「見えない事柄の实在」です。「信仰は、望んでいる事柄を実体として確かなものとし、見えない事実を証しするものです」([ヘブル 11 章 1 節](#); [第二コリント 4 章 18 節](#), [5 章 7 節](#)参照)。ヘブル書の著者は続けて、信仰がクリスチャン生活の最重要徳の一つであると示します。信仰によって、昔の信仰者たちは神に喜ばれ、この世の価値観に真っ向から逆らうかたちで神の証人となりました([11 章 2-40 節](#))。彼らは信仰によって行動しました。第 1 節によれば、その信仰は彼らの望みを現実のものとし、それゆえ確信をもたらしたのです。その結果、この世の意見は比較にならないほど無価値なものとなりました。著者は、通常見られるものとは逆の視点で物事を述べています。「私たちに証拠を見せてください！」しかしヘブル書の著者は、過去の真に称賛に値する信者たちにとって、物事はこれとは全く逆の方向に働いたと教えています。彼らは、現時点ではただ望むことしかできなかったもの(神の約束された報い)が確かに実現すること、現時点では見えないもの(神の存在と義)がそれにもかかわらず現実であることを信じていました。こうして、その信仰そのものが、彼らの望みの根拠、見えない事柄の証拠となったのです。なぜなら、彼らの望む報いも、それを授ける義なる神も、実在するからです。もし真の報いがなく、公正で義なる神がいなければ、そのような信仰と、それがもたらした偉大な業は、この世に決して存在し得なかったでしょう。しかし実際には、これらの勇気ある信者たちの驚くべき証しこそが、神の力と实在、そして信仰に耐え忍ぶすべての人々に備えられた栄光の報いの確かな証拠なのです。したがって信仰とは、私たちのキリスト教信仰全体を包含するものです([ガラテヤ 1 章 23 節](#))。信仰とは単なる心の態度や行動を超え、信頼性を意味します([ローマ 3 章 3 節](#))。それは告白であり、降伏であり、服従であり、決断であり、神への恐れの中で神の権威に従い、それを尊ぶ謙遜の行為です。神の誠実さへのこのような完全な献身と依存によってのみ、私たちはまだ目に見えない約束された驚異の現実を体験するのです。

**信仰は単なる知的過程ではありません:** 信仰は、神の存在やキリストの神性の理解・承認にとどまりません。ヤコブは言います。「あなたは、神はただひとりであると信じているのか。それは結構である。悪霊どもでさえ、信じておののいている」([ヤコブ 2 章 19 節](#))。彼の要点は、信仰とは、神の实在やキリストが神の独り子であるという事実の知的認識にとどまらない、ということです。信仰は情報の認識を超え、それらの事実を受け入れ、抱きしめます。人が、御父に至る唯一の道、死とさばきから逃れる唯一の道とし

て主イエス・キリストを信じる時、その人は直ちに永遠に変えられます。単なる知的判断で、そんな奇跡が起こるはずがありません。ですから、福音の事実を(聖霊の力によって)理解するのと併せて、信仰にはキリストに従うという明確なコミットメントが伴います。この考えは、ギリシア語のエピグノーシス epignōsis (認識) にも表れています。救いの文脈で「神の知識」を表す語(および動詞エピギノスコ epiginōskō)としてよく用いられますが、エピグノーシス epignōsis には、神の真理と御心を「認める(承認する)」こと、ひいてはそれに「従う」ことの意味があります([ローマ 1 章 28 節](#); [第一テモテ 2 章 4 節](#); [第二テモテ 2 章 25 節](#))。

**信仰のしくみ:** 聖書において、個人的な救いについての最初の詳しい記述は創世記 15 章 6 節に見られます。そこでは「アブラハムは主を信じたので、主はそれを彼の義と認められた」と書かれています。旧約時代において、信仰者たちは十字架を見据えていました。すなわち、神がいつか罪を取り除き、救いへの門を開かれる日を待ち望んでいたのです([ローマ 3 章 25 節](#)後半参照)。神は、ご自分の御子の犠牲によってこの世に成し遂げられる大いなる救いの御業について、常に証しを残してこられました。アダムとエバに与えられた皮の衣から、レビ記における捧げ物の制度、そして実際の十字架の日に至るまで、神は耳を傾けようとする者に対して、私たちの救いが「罪の代価を私たちの代わりに払う、他者の犠牲」にかかっていることを、常に明らかにしてこられました。アブラハムは神を信じました。自分自身や自分の義ではなく、最終的な救いをもたらして下さる神を信頼したのです。そしてその信頼を一生涯持ち続けたことが、彼にとっての救いの道でした。[ローマ 10 章 9-10 節](#)でパウロは、今日の私たちについても同じであると語ります。「もしあなたが自分の口でイエスを主と告白し、心で神がイエスを死人の中からよみがえらせたと信じるなら、あなたは救われるのです」。ヤコブは、この信仰のしくみにパウロが「何かを付け加えている」のではないことを明らかにしています。ヤコブが指摘するのは、信仰が実際の生活の中で表されなければ、本当の意味で信仰者とは言えない、ということです([ヤコブ 2 章 18-26 節](#))。証拠としてヤコブは、アブラハムがその最も厳しい信仰の試練、すなわち息子を犠牲にせよという神の命令を、信仰によって乗り越えたことを引用します。ためらうことなく、アブラハムは、自分が信じた神がすべてを善に導いてくださると信じました。そしてイサクが、神によって備えられた代わりの犠牲によって救い出された出来事は、今日に至るまでキリストの犠牲を指し示す型となっています。もし私たちが心から神を信じているのなら、「口でイエスを主と告白する」ことが伴わないはずはありません。さらに、私たちがキリスト者として歩む生涯の中で、神が私たちを通してなされる、あらゆる信仰のあかしも同じです。ですから、私たちが救い主イエス・キリストの御業を十字架において振り返るときに得る明確な救いの理解を別にすれば、救いの道はパウロにとってもアブラハムにとっても同じでした。すなわち、「信じること」です。アブラハムは、自分のために神が用意される犠

性を希望をもって待ち望むことしかできませんでした。しかし私たちは、主イエス・キリストの十字架における御業を確かに知っています。その知識について、ペテロは「預言者たちは熱心に探し求めた」と語っています([第一ペテロ 1 章 10-12 節](#))。ですから、[ローマ 10 章 9-10 節](#)の「告白」の部分は、信者になるための前提条件ではなく、むしろパウロの意図はこれです。すなわち、神がアブラハムにそうされたように、またヤコブが別の仕方でも強調しているように、「すべての真の信者は、その行いによって識別できる」ということです。つまりこの場合、もし本当にキリストに信仰を置いたのなら、イエスを主と告白することを拒むはずも、拒む気持ちになることもありえないのです。

**福音の内容:**キリストこそが「良き知らせ」(ギリシャ語エウアγγελイア euangelia)の内容であり、御子を信じるすべての人々に対する、罪と死からの救いをもたらす神からの喜びの知らせです。私たちの信仰の基盤は、これ以外にありえません([第一コリント 3 章 11 節](#))。とはいえ、最初に救われるために、キリストについてどれほどの情報や知識が必要なかを考える必要があります。なぜなら、信仰を持った私たち全員が、救い主について、信仰を持った直後に知っていたことよりも、信仰を置いた後にはるかに多くを学んだことは明らかだからです。信仰の父であるアブラハムの例を再び考えてみましょう。彼は、キリストの受肉について、私たちが今知っていることすべてを知っていたわけではありません。なぜなら、イエスが真の人性を受け入れ、私たちの代わりに死なれるという多くの詳細は、それが歴史的現実となるまで、目に見えなかったからです([第二コリント 3 章 12-18 節](#))。しかし、十字架の後においては、救いの核心は(旧約聖書におけるような)神の犠牲の原理ではなく、キリストご自身です。したがって、救われるためには、キリストの人格と御業を信じ、あるいは認める(ギリシャ語 epignosis: 単なる理解ではなく、むしろ受け入れ)ことが必要です。父なる神は御子イエス・キリストを救いの核心とされました。ゆえに今や、これ以外の救いの道は存在しません([ヨハネ 5 章 23 節](#), [12 章 44 節](#), [14 章 6 節](#); [使徒行伝 4 章 12 節](#))。

**救いの信仰の行為:**キリストを信じることは、本質的に、キリストご自身とその御業が私たちの代わりに引き受けてくださったことを受け入れる行為です。すなわち、私たち自身では死と裁きに値するのみであり、墓を免れることは全く不可能であることを認めることです。しかし、神が全人類に共通するこの運命からの救いの道を用意してくださったという良き知らせを聞いた時、私たちはイエス・キリストとその私たちのためになされた死という「良き知らせ」を受け入れるのです。したがって、この観点からすれば、信仰の行為とは本質的に、自らの義ではなくキリストの義に立つという選択をすることです(参照:[創世記 15 章 6 節](#); [ローマ 3 章 21-26 節](#); また、キリストの「罪を負う」姿の象徴としてのアロンを参照:[出エジプト記 28 章 38 節](#))。私たちは、罪と死からの救いのために、キリストに信仰を置きます。この最後の要素は極めて重要です。福音の良き知らせ

とは、キリストの御業に基づいて私たちが赦され、その赦しを、それを成し遂げられた方への信仰によって得るという宣言なのです。したがって、赦しと救いに対する私たちの必要性を何らかのレベルで認識することは、救いの信仰において重要な要素です。主が言われたように、「赦されたことの少ない者は、愛も少ない」([ルカ 7 章 47 節](#))。さらに、死と罪からの救いが切実に必要であるということを真に信じ、はっきりと認識しない限り、どうして神の恵み深い御提供を受け入れる適切な動機が持てるでしょうか。このように、救いの必要性和機会は、実は表裏一体の関係にあります。救いの必要性(悔い改め)を信じるからこそ、救いの現実(キリストへの信仰)を信頼するのです。したがって、[ローマ 10 章 9-10 節](#)に記されている「信じる」と「告白する」という二つの行為は、不可分のものであり、密接に結びついているのです。

**信仰は基本的なキリスト教的徳目:** すでに第一ペテロの学びの中で何度も見てきたように、信仰はキリスト教における基本的な徳目です。第一コリント 13 章では最初に(そして基礎として)挙げられ、[ヘブル 6 章 1 節](#)でも、すべてのクリスチャンが十分に理解すべき基本原則として示されています(また、ペテロの徳目一覧でも最初に挙げられています[[第二ペテロ 1 章 5 節](#)])。信仰がなければ、クリスチャン生活において何の前進もできず、また、神の御心とご計画に従って何かを行うことも不可能です([ヘブル 11 章 6 節](#))。信仰は基本的な徳であり、すべての他のキリスト教的徳目がその上に築かれる「礎」となる徳なのです(希望:[ヘブル 11 章 1 節](#)、愛:[第一コリント 13 章](#))。

**キリストに対する信仰こそ唯一の救いの道:** 主イエス・キリストは、私たちクリスチャンの信仰と生活の中心であり、焦点です([ヘブル 12 章 2 節](#))。十字架における御業によって、キリストは全世界の救い主とされました([第一ヨハネ 2 章 2 節](#); [第一テモテ 4 章 10 節](#))。他のいかなる仲介者によっても、御父に近づき、その赦しや承認を得ることはできません([ヨハネ 14 章 6 節](#); [エペソ 2 章 18 節](#))。キリストこそ、信仰の唯一有効な対象、すなわち、救いを得るために正当に信じることのできる唯一のお方です。[使徒行伝 4 章 12 節](#)でペテロは明確にこう語っています。「ほかの誰によっても救いはなく、私たちが救われるべき名として、天下にこの名のほか、人に与えられたものはないのです」。門は狭く、その道は困難ですが、永遠の命を受けるためには、イエス・キリストを主また救い主として受け入れるほかに道はありません([マタイ 7 章 13 節](#); [ルカ 13 章 24 節](#))。人生がどれほど困難であろうと、また住む場所がどれほど隔絶されていようと、神はすべてを考慮しておられます。そして十字架以後の基準は常に同じであり続けています——すなわち、キリストへの信仰です。いかなる善行や犠牲をもってしても、御父の目において御子の十字架の御業に代わることは決してありません([エペソ 2 章 8-9 節](#))。

**信仰は人を分かち:** 福音は無代価で、私たちの功績を要求せず、すべての人に開かれています。神が求めておられるのは、御子イエス・キリストのご人格と御業を受け入れるという従順だけです。ところが人間の歪んだ思考にとって、この単純さと寛大さはしばしばつまずきになります。ある人にとって福音は「簡単すぎる」ものであり、別の人にとっては「知的に物足りない」ものです([第一コリント 1 章 23 節](#); [列王下 5 章 1-14 節](#)参照)。自分の行為が神にさばかれるという考えに反発し、罪の現実を否認し、行いが悪いゆえに真理の光を憎む者もいます([ヨハネ 3 章 19-21 節](#))。それでも私たちは、時代の人間的意見がどうであれ、真理の側に立たねばなりません。イエス・キリストへの信仰以外に、救いの道はありません。この揺るがぬ立場はしばしば分裂をもたらしますが、真理はそうでなければならぬのです。神が地と水を分けられたように([詩篇 104 篇 9 節](#))、またアブラハムに屠った動物を二つに裂かせてその間を通らせられたように([創世記 15 章 8-17 節](#))、そして光と闇を分けられたように([創世記 1 章 3-4 節](#); [ヨハネ 1 章 5 節](#)参照)、神は生ける者と死んだ者を分けられます。その分け目、すなわち永遠の命と永遠の滅びを隔てる決定的な基準は、御子に対する信仰にほかなりません。主が再び来られるその日まで、私たちはこの信仰の問題、すなわち福音そのものが、人類を二つの陣営—信じる者と信じない者—に分ける剣となることを覚悟しなければなりません([マタイ 10 章 34 節](#); [ローマ 2 章 8 節](#)参照)。

**信仰は終わりではない:** 信じる者にとって、クリスチャンとしての人生はそこから始まるのです。信仰によって自分の十字架を担ったあと、キリストは私たちに「わたしについて来なさい」と命じられました([マタイ 16 章 24 節](#); [マルコ 8 章 34 節](#))。信仰によって神の家族の一員となった以上、私たちは生涯を通じて主に従おうと努めながら、信仰によって歩まなければなりません(第二コリント 5 章 7 節)。さらにルカは、この「従う」ことについて二つの重要な点を加えています。一つは、これは毎日行わなければならないことであるということ(ルカ 9 章 23 節)、もう一つは、この「従う信仰」がなければ、私たちはそもそも主の弟子と見なされることができないということです([ルカ 14 章 27 節](#))。ギリシヤ語で「弟子」と訳される語は mathetes (マテーテース)で、「学ぶ」という動詞の語根から派生した「学ぶ者」「生徒」という意味を持ちます。したがって、キリストに従うことと、主が聖なる御言葉において私たちに託してくださった真理を学ぶこととは、根本的に結びついており、切り離すことはできません。キリストに従うとは、御言葉を学び、それを理解し、信じ、実行に移すことなのです([ヤコブ 1 章 22 節](#))。

クリスチャン生活

聞く(信仰によって) → **御言葉を信じる** → 行(行いによって)

**信仰の結果:** キリストを信じる者には多くの恵みが伴います(L.S.シェーファーは組織神学第 3 巻で、恵みにより信者に帰せられる恩恵を 33 項目に数え上げています)。

中でも、最も重要でありがたい祝福の一つが「義認」です([ローマ 5 章 1 節](#))。義認(すなわち、信仰によってキリストの御業に依り頼むがゆえに、神の目に義とされること)は、霊的死から永遠のいのちへの救いという結果をもたらします([ローマ 3 章 21-22 節](#); [第一ヨハネ 5 章 11 節](#))。キリストにあつて信仰により結ばれている私たちは、もはや神の恐るべき最後のさばき——第二の死——のもとにありません([ローマ 8 章 1 節](#); [黙示録 20 章 11-15 節](#))。すでに「死からいのちへ」と移っているのです([第一ヨハネ 3 章 14 節](#))。

**信仰は保たれなければならない:** 最後に、信仰は決して当然のもののみならずよいものではありません。パウロはコリントの人々に「自分が信仰の中にあるかどうかを確かめ、吟味しなさい」と勧めています([第二コリント 13 章 5 節](#))。これは非常に有益な助言です。なぜなら、信仰を保ち続けることの最終的な報いが、復活と永遠の命だからです。私たちは、神がご自分に信頼する者に対して真実でいてくださることを確信できます([詩篇 32 篇 10 節](#))。しかし、同時に私たち自身も神に対して忠実であり続けなければなりません([第二テモテ 2 章 12-13 節](#))。つまり、終わりまで私たちが告白した信仰を固く守り続けることを意味します。結局のところ、最終的にこの戦いを決定づけるのは信仰なのです。

わたしたちの信仰こそ、世に勝たしめた勝利の力である。(第一ヨハネ 5 章 4 節後半)

**結論:** 私たちの人生がどれほど困難であろうと、道がどれほど険しく、門がどれほど狭くとも、イエス・キリストに対する信仰において忍耐し続けることは決してむなしいことはありません([第一コリント 15 章 58 節](#); [ガラテヤ 6 章 8 節](#))。なぜなら、その門の向こうには永遠が広がり、私たちの理解を超える祝福と慰めが待っているからです。

もうしばらくすれば、きたるべきかたがお見えになる。遅くなることはない。わが義人は、信仰によって生きる。もし信仰を捨てるなら、わたしのたましいはこれを喜ばない。(ヘブル 10 章 37-38 節)